

月刊

いじろのとも

第五卷

七月号

いじろをまよす

汚れたる

ところで

語り

行えば

自ずと苦難

つき従いぬ

浄らかな

ところで

語り

行えば

自ずと福楽

つき従いぬ

宗教と反省

宗教は

反省を

求めるもの

なのに

宗教の中には

信じるほど

傲慢になって

反省が

できなくなる

ものがある

そんな宗教は

うその宗教

人生を考え直して

みたい人は(七)

『老子』解説(六)

今月は、第十六章を取り上げます。

(第十六章)「虚」の極致に至り、その「静」に熱心に励めば、この世のあらゆるものは、現象してももとに帰るものである、ということが分かるようになります。それらのものは、様々に動きませんが、そのおのおのが、それぞれの根元に帰って行くのです。この根元に帰ることを「静」と呼ぶのです。これはまた、「命」に復(かえ)ることであると言います。命(めい)に復(かえ)ることを「常(つね)」と言います。常を知れることを、「明(めい)」と言います。ですから、常を知りませんとものがよく見え、みだりな言動になり、悪をなしてしまいます。常を知りますと、あらゆるものを包容することができます。包容することができるということは公平無私であることができるということです。それは「天」であるということですであり、「道」であるということです。道

は永久ですから、この身も安らかで無事でいられるということになるのです。

本章は、深い真理を含んでいますが、それだけに訳しにくい言葉がいくつも出てきました。それらを説明的に訳しますと、だらだら長くなりますので、括弧に入れてそのまま示してみました。虚、静、命、常、明、天、道などです。説明の必要があるものは、それぞれの文脈の中で説明していきたいと思います。

さて、この章の主題は、出だしの文と最後の文が示しています。つまり、「『虚』の極致に至り、その『静』に熱心に励めば」「それは、『道』であるということです。道は永久ですから、この身も安らかで無事でいられる」ということになるのです」という部分です。まず、ここから解説して行きたいと思えます。

虚とか静とか、出だしからしていきなり難しい言葉の羅列で、恐縮です。まず、虚の極致に至るということです。これは、あらゆる自分の執らわれや、はからいを捨てて、自分の統制が自由自在になることを言っています。仏教で言えば解脱に至ることだと言えます。

普通、虚といいますが、虚しいということの意味ですが、ここではそうではなくて、自分の執らわれやはか

らいが無い、自分の欲望や邪心が無くなった状態になっている、ということの意味します。

次の、「静」に熱心に励む、ということですが、これは、虚の極致が静で、それをそのまま維持するように精進していく、ということを行っています。では、静とは何なのでしょう。もっと難しいことばになるかも知れませんが、それは、静寂とか安静とかいった心の澄んだ状態を示します。また、老子の考え方を信奉する後の道家では、静は修行のことを言うようです。ということとは、自分の執らわれを捨て去り、修行に励むことを意味する、ということになります。そうして達した境地、あるいはその行為そのものが、静であるということにもなるということです。

こうした、虚の極致に達し、静に励むことはそのまま、道に達することであると云えます。そして、道はあらゆる存在を存在せしめる宇宙の根元で、永遠で無限で絶対です。ですから、道に達しますと、道とは対照的な、この有限で相対的で時間的な自分自身も、永遠で無限で絶対に至るということになるのです。

こうしたことは、言葉で言いつても、実際の体験が伴わない限りなかなか実感として分かって頂けないと思います。ですから、そうなのだと思じて頂きたいと思

ます。ひたすら修行し、虚の極致に達しない限り、信じる以外に分かる方法はないのです。

さて、次の部分に進みたいと思います。静に励めば、この世のあらゆるものは、現象はしても元に帰るものである、ということが分かるという部分ですが、これは道に至れば、あらゆるものと一体になれますので、あらゆるものが道を根元として現象していると感じることができるようになることを言っています。そして、この根元に帰ること、そのことが静であると言えるのです。

私の「自己・他己双対理論」に基づいて、人間の精神に即して「根元に帰り静となる」ということを説明しますと、私たちの意識を構成している 情動・感情、感覚・運動、 認知・言語、 自我・人格の四つの機能領域の働きを抑え、無意識へと降りていき、その働きであると考えられる「煩悩蔵」と「如来蔵」とを統合することを意味しているのです。

それらは、私たちが意識できないけれども、人類が動物から飛躍し、断絶して進化したとき贈られた人間固有な精神の働きなのです。そこに、人間が人間たる根元を宿しているのです。そして、有り難いことに、老子もする

どく指摘していますように、人間はそこへ帰っていくことができるのです。そして、そこへ帰って行く時、私たちは道を実感することができると言えるのです。

しかし、そこへ至るには、あたま（認知 言語）で考えただけではだめなのです。言葉で理解しただけではだめなのです。先程述べましたように、そうだとひたすら信じて、根元へ帰っていく修行をしなければならぬのです。その修行は、ヨーガであり、お祈りであり、読経であり、瞑想などであるわけです。私たちは こうした「あたま」と「からだ」と

「こころ」を統合する修行によって、無意識に降りていくことができるのです。

次の部分に進みます。それは、静は命に復ることであると言い、命に復ることを常と言い、常を知るところを明と云う、

というとても難しい部分です。この部分は、読んだだけでは、

何を言っているのかよく分からないと思います。でも、解説すればお分かり頂けます。

まず命に復るといいますが、この命は、天がそれぞれのものに命じた在り方を言うのです。孔子の言葉に五十にして天命を知るといいますが、それです。

これを人間について言いますと、無意識の中に煩惱蔵と如来蔵を備え、それらを統合することが人間が真の人間になる道であるというのが、天の命じた在り方だと言えるのです。

次の、命に復ることを常という、という部分の常ですが、これは、恒常不変、永遠不滅であることを意味します。人間の真の在り方は無意識の統合にあるわけですが、そうすることで自分が永遠不滅となって行く、ということを書いてあります。

次の、常を知るところを明という、という部分の明ですが、
聡明という言葉がありますように真理を知る智慧を言います。

人間では無意識の煩惱蔵と如来蔵の統合がとれず、両者が分離している状態を無明と云い、それらの統合された状態を明と云います。

これに続く後の文は、明に至っているかどうかで行動が違うことを述べるものです。明を得ますと、自分への執らわれを克服していますから、自分を含めてものが客観的に見えます。自分に執らわれてものごとを見ません。ですから公平無私で、あらゆるものを包容することができます。それは、自分と他のあらゆる存在とが根元を通

自作詩短歌等選

じて自分と等しいと感ずることが出来るからなのです。
ところが、明を得ていませんと、その逆で、自分の利害がからんできませんと、自分への執らわれがありますから、包容することはできず、自分と他とを区別（仏教では分別）して、いつでも過ちを犯してしまふのです。ですから、いつでも不幸がそこに迫っていると云つてもよいのです。

これで解説を終わりますが、少し難しかったのではないかと思います。とても深遠な真理を説いていますので、致し方なかったのではないのでしょうか。何度も何度も読み返して味わつて頂きたいと思ひます。

虚、静、命、常、明、天、道。これらの概念には、仏教にも、関連したり、対応している概念があります。人生の真理は、そう沢山あるものではありません。老子には老子の個性がありますが、しかし、解脱した人に共通した普遍性があります。

いまあげました、七つの概念は老子の個性を示すと同時に普遍性をも示しています。いちいち解説はしませんが、仏教ではどういうことに対応しているのか、ご自分で考えながら、復習していただくのも、また、一つの積極的な老子の読み方になるのではないのでしょうか。

坊主の出家

うらみはやむ

あの人

奪い

罵り

勝ち

害したと

思い暮らせば

うらみは息まず

なのに

あの人

奪い

罵り

勝ち

害したと

思わず忘れば

うらみは消える

今の坊主は
出家しないで
世間にいるから
世間が見えない

人間は不完全

人間は

みんな

不完全

それが

あたまだけでなく

からだも

ここで

わかるとき

人は

限りなく

完全に

近づく

議論は情動が大切

議論は冷静に

すべきだと

言う

でも

多くの人は

冷静でも

間違つて

議論する

人間を説得するのは

ここに

ここは

情動と感情

大切なのは

情動を込めても

間違わない

ということ

でき損ない

この

でき損ない

と言いたい

人がいる

障害は

どこにもないのに

根性が

まがつている

なのに

自分では

そうは思わないから

直そうともしない

とても

傲慢だ

製造責任者

出てこーい

せつなてき

いまことばが

せつなてき

ラッキー

ヤッター

カイカン

自作随筆選

福岡正信語録

五月二二日（日）のこころの時代は、愛媛県伊予市大平在住の自然農法実践家福岡正信氏への、金光寿郎氏のインタビューでした。響感することばかりでしたので、ここに紹介させていただきます。

一〇年前から農業がおかしいと思っていた。四、五年前から加速度的におかしい。絶望的におかしいと思う。

この四ヘクタールの土地には、ここへ入った戦後すぐは、さつま芋しか出来なかった。クローバーを蒔き、果樹を植えて徐々にこうなってきた。今は、パラダイスで、ジャングルのようになっている。このせんだんの木は鳥が蒔いてくれた。二、三年でぐんぐん大きくなる。

この赤土は寝ていた。それを植物が起こしてくれる。クローバーが、そのきっかけとなった。生き返る。鳥、モグラ、ミミズがいるが邪魔をしない。害虫はいても害がない。蝶々はいても青虫に食べられた大根がない。

ところが、この地球は十年前と較べて急速に砂漠化している。日本人も若い人が青年海外協力隊として、緑化

に協力しようとしているが、絶望的である。自然の滅びる速度の方がずっと早い。

日本の農業が滅びている。ウルグアイラウンドで自由化が進んだから。果物が滅んでいく。ここでも、タケノコやフキがお金にならなくなった。これまで山菜だけで八十万円ぐらいとれたが、今年から息子も嫁もやめた。中国からのものに圧倒されて、引き合わない。

日本の農業が滅びる。日本の農業が滅んだら、朝鮮、中国の農業も滅びる。企業農法、近代農法のため。それによって、アフリカもインドも、先に滅んでいった。

ヨーロッパもアメリカも土地がだんだん死んでいっている。日本は外国に農業を依存しようとしているが、その外国が減んでいっている。

近代農法、企業農法では、増産という考え方が基本にある。それがおかしい。自然が一番能率がよい。一番増産している。なのに人間が手を加えて駄目になっている。それは、一人じめして金儲けしようとするから。その考え方が間違っている。人間は自然に生きていれば百二十歳まで生きられるのに、肉のような美味しいものばかり食べて、病気になる、薬で治療してやっと八十歳まで生きていく。それと同じだ。

今の農業は機械を使って耕すが、これは間違っている。

人間が一番効率が良い。人海戦術が一番よい。

自然農法を実践したり、しようとしていいる人は多いが、なかなか成功しない人が多いのは、基本的な考え方が間違っているから。その考え方の基礎にはキリスト教の自然観がある。

自然は無秩序で、悪魔である。人間がそれに秩序を作っていく。人間が自然を作っている。こうしたキリスト教の考え方は、自然に対して傲慢である。また、一反歩あれば食えるのに、文化生活が出来ないという。

今年の四月から、粘土団子の作り方を教えた。いままでは失敗談を書いたりはしたが、教えたことはなかった。その種子団子には、せんだんの実を入れたり、薬草を入れたりする。いま、砂漠化防止に、早く太るユーカリ（オーストラリア産）を植えているが、間違い。いろいろの種子を混ぜる、この粘土団子にこそ近代農法の全てが含まれている。百〜二百種類の種を混ぜるのがよい。例えば、マツタケ菌を混ぜた松の種をまけば松の育ちがよい。科学を否定する科学がいる。アメリカもヨーロッパも土が死んでいる。地上一メートルはよいが地下はだめ。砂漠化は、実は耕作に始まる。耕運機は大間違い。

粘土団子の作り方は種子（一）に粘土（五）の割合で、

適当な湿りけが得られるように水を加え（やり直しがきかないから気を付ける）、中の羽をとったコンクリートミキサーで二十分〜三十分回す。ミキサーの角度が大切。団子の粒の大きさに関係する。

入れるものは、ユーカリばかりではだめ。砂漠化を促進する。日本でも、ひのきや杉の植林を盛んにしているが間違い。後が三代に渡って土地がやせてできない。アカシアや大根をもつと一緒に入れて蒔く。象の住める森を作れと言っている。

ここでは、ハヤトウリを植えている。病虫害の被害は全くない。益虫、害虫、役に立つ、立たないは、人間の近視眼的見方に過ぎない。害虫はいても害はない。どうしてか分からない。五十年間自然を見ていた積もりが、ものが言えなくなった。これは、人智が役に立たないことを証明している。私の書いた本も読んで済んだら捨ててくれと言っている。

稲の粘土団子を作るときは、モミだけにしている。本当は粘土団子を作らなくてもよいはずだが。

自然農法をしている人でも、よりよい粘土団子を作ろうとして微生物を入れようとする人が出てくる。そしてそれを売って金儲けしようとする。それを捨てたところに自然農法があるというのに。

本当は、幸福は科学では得られない。自然から感じるもの。相対的な喜びではない。

ダーウインの進化論は否定すべきもの。坊主は時空を超えて悟る。そこでは、相対的な知恵が消える。(ダーウインの進化論は時空の相対を説いたもので、人間の幸福にはまったく役立たない)。抽象的な喜びは、頭だけのもの。自然を肌で感じる幸せでないとだめ。衣食住を芸術品とする。ここは入山禁止だが、鳥になつて売れないものを取りにくればよい。生きる心配をするから、生きられない。作物があつて人間がある。人間が作物を作つて商売しだしたことが、間違いのスタートになつていく。

ダーウインの進化論でいう、適者生存、優勝劣敗、競争原理が、この世をだめにしている。

釈尊のじつば(一一五)

法句経解説

(九四) 御者が馬をよく馴らしたように、おのが感官を静め、高ぶりをすて、汚れのなくなつた人
このような境地にある人を神々でさえも羨む。

この偈を読んで、私はヨーガのことを思い出しました。さつそく佐保田鶴治著『解説ヨーガ・ストトラ』(平川出版社刊)を取り出してきて、ヨーガの定義を調べてみました。次のような記述が見つかりました。

「ヨーガという語の最も古い用例は『馬を馬車につなぐ』という特殊な意味で使われております。」(二五頁)。

「カタ・ウパニシャッドのなかで・・・ヨーガを定義して『五つの知覚器官が意とともに静止し、覚もまた動かなくなつたとき、人々はこれを至上の境地だといふ。』

かように諸々の心理器官をかたく執持することを人々はヨーガと見なしている」と記しております(二七頁)。

「ヨーガという名称をもつた一つの行法のシステムが成立したのはブツダによつて仏教が開かれるよりも一世紀以前であつただろう」(二六頁)。

「アートマンを車主と知れ。肉体を車、覚を御者、意を手綱と心得よ。賢者たちは、もろもろの知覚器官を馬とよび、諸知覚に対応する諸対象を道路とよんでいる」(二八頁)。これらの引用を見ますと、この偈とヨーガの関連を推定せざるを得ないように思えます。

なお、この偈の解説は、これ以上、省略いたしますが、ただ、引用に見慣れない言葉が出ていますので、少し解説しておきます。ストトラですが、これは經典のことで

す。カタ・ウパニシャッドは、インドの古い哲学書の一つです。アートマンは、「梵我一如」をめざすバラモン教の、我に当たるものです。因みに、梵に当たるものはブラーフマンと言います。

(九五) 大地のように逆らうことなく、門のしまりのように慎み深く、(深い) 湖は汚れた泥がないように そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。

「母のような大地」という言葉がありますように、大地はあらゆるものを受入れ、包み込みます。雨が降れば吸い込み、吸い込めなければ貯め、流し、日が照れば含んだ水を蒸発させます。上に道路ができればそれもよし、家が建てばそれもよし、自然の植物が繁れば、なおさらよしです。けっして逆らうことはありません。

次の門ですが、お城の門をイメージして頂ければ分かりやすいように思います。ただ、お城の門は多くの場合、外部からの侵入を防ぐ目的だと思えますが、ここでは、外部からの誘惑に心の門を閉ざして、それに負けないようにするのは、自分を抑えて門から出さず、他者に対し

て慎み深くするのと、両方があるように思われます。

次に、深い湖は汚れた泥がない、というところですが、ここでは特に深いという言葉に意味があるように思います。つまり、人間の心の汚れも人間の心の深いところにあると考えられるのです。普段、自分では意識できない部分にあるのです。ですから、これを除去するには、意識の水準では効果はあまりありません。無意識に働きかけるものでなくてはならないのです。

それは、ただ、ひたすら坐禅するとか、ひたすら念仏をあげるとかといった、「あたま」と「からだ」と「こころ」を統合して、実践的に修行しなければならぬのです。

そうして、心の深い部分の汚れを落としますと、人間は生死を超えた境地に至れるのです。死ぬことにも、生きることに、こだわらなくてもよくなってくるのです。死ぬもよし、生きるもよし、といった境地に至れるのです。

なお、四月号では次のような偈を解説いたしました。
(八二) 深い湖が、澄んで、清らかであるように、
賢者は真理を聞いて、こころ清らかである。

(九六)正しい智慧によって解脱して、やすらいに帰した人 そのような人の心は静かである。ことばも静かである。行ないも静かである。

真言密教の念誦次第(お祈りの仕方を書いた本)には、「戒・定・慧・解脱・解脱知見(かい・じょう・え・げだつ・げだつちけん)」と唱えるべきことが定められています。

これは、戒律を守り、身を清めて、禅定に励めば、仏の智慧を得て、解脱に至り、自分が解脱したという自覚を得て、開放された心の安らかさを知ることができる、ということ念誦者に意識させるためのものです。こう見てみますと、まさしくこれは仏道修行の本質を表すものと考えられます。

この偈の前半は、戒と定はありませんが、この「戒・定・慧・解脱・解脱知見」に当たっていると考えられます。

このように、解脱して心の安らかさを得、開放された喜びにひたっている人は、「こころ」が静かであり、「あたま」の働きである語らいも静かであり、「からだ」でする行いも静かである、というわけです。

この解脱に至った境地は、サンスクリット語でニルヴァーナと呼ばれるますが、その漢訳が涅槃です。涅槃の心理状態を表す言葉に涅槃寂静(ねはんじやくじょう)があります。この偈で言っていることも、この涅槃寂静のことだと思われまます。

なお、本月号の『老子』にあります「静」もここです。「静かである」というのと、共通性をもっていることは明らかです。

読者とのコミュニケーション

俳句

七夕に夢も願わず塾にいく

終戦日球児黙袴甲子園

運動会出番の遅いひとりっ子

落葉降り風の流れにさからわず

山猿か痛さこらえて栗をむく

すずめ共不作の稲に近よらず

赤とんぼ夕日と共に消えて行く

紅葉見る妻のメガネの色に染み

(徳島県・小原白峰)

お便り

健康のもと(五) 酒類の優劣は市価が明確に示している。これを化学分析すればタンニンの含有量に正比例する。然るに世界中の人が知らない。次頁の表に示す如く、日本酒のうち辛口は醸造用アルコールが過ぎていゝ。並口のABCの三銘柄は毒にも薬にもならぬ。阿波銘柄はピンからキリまでである。伊予川之江の梅錦は毎年金賞をとっている。

洋酒で、日本産の辛口ABCは発癌酒でボトル千円から二千元、並口のスコッチAとBはまあまあで、五千元〜七千元、ナポレオンは二万円〜三万円、スペシャルが四〜五万円、エクストラが六万円以上と檜樽のタンニンの度で価格もピツタリ。不思議だ。ビールでは、私の聴講社アサヒドライが最高を記録した。要は砂糖ならぬタンニンのコク風味が、市価と健康度を左右する。無タンニンの焼酎は胃癌、肝炎、ATL(エイズの兄弟菌)の誘因となる。日本西部のATLは世界一で、百万とも二百万とも言われるC型肝炎の主流だ。日本の焼酎とカリブ海沿岸のウォツカが犯人だ。(阿南市・片田一郎)

後記

一、私は、死ぬまで学問を続けたいと思っています。そのための準備と思い、できるだけ古本屋さんを訪ねては、心理学、宗教学、教育学、哲学などの本を購入しています。最近、老子の本で昭和初期に出た分厚い本を二冊買いました。シリーズの『老子』解説の参考になっていますが、竹内義雄著の「老子之研究」には及びません。また、いつかソクラテスについて書きたいと思い、プラトン全集で持っていないものやソクラテスが書名につく本は、できるだけ買って置きます。最近も、昭和初期に出た『ソクラテス』と題する本を二冊買いました。二、あるじつこんな古本屋のご主人に教えてもらって、古本屋としては、今までに見たこともない大きなお店に行きました。それは、岡山にある万歩書店という店で、なるほど大きくびつくりしました。何十万冊もあるうかというほどで、おおげさに言いますと、迷子になりそうでした。通りに名前まで付けてあります。全部を細かくみることはできませんでしたが、たくさん買って来ました。

三、いま『障害児の心理と響育』という、教科書の積もりの講義録を書いています。一部、私のゼミをとった方にも協力して頂いています。

四、いま、たいさんばくが大きな花を付けています。真

っ 白い花びらが印象的です。あじさいは小さな花をつけ
始めました。もう梅雨も間近です。
お便り、質問、感想、詩、短歌、俳句、川柳など、ど
うぞお寄せ下さい。

月刊 こころのとも 第五卷 七月号 (通巻 五十五号)	平成六年七月八日 (発行人) 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small> (制作) ユニオンプレス (発行所) ひびきのさと エコリーコミュニケーション研究所 〒771 43 徳島県勝浦郡勝浦町星谷 星の岩屋
--	---

本誌希望の方は、送料として郵便振替で年間千円を
次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさ
と 口座番号 01610 8 38660